



中込 貴博医師

の中込貴博医師は「がんは早期発見が重要。コロナ禍であっても、がん検診を積極的に受けてほしい」と話す。

中込医師によると、肺がんは早期がん（ステージⅠ）だと手術の単独治療で完治が期待できる。進行がん（ステージⅡ以上）患者の割合



同院で行った肺がん手術患者を各年4～6月と比較すると、2017～19年は進行がん患者の割合が20%台で推移していたが、20年は63.2%と大幅に上昇した。手術に至った経緯を調べてみると、肺がん検診で見つかった患者数は20年において前年より大幅に少なくなっていた。県内では20年、人間ドックや定期健診施設の一時的な止があったことに加え、中込医師は「検診控えも影響している可能性が高い」とみる。

日本肺癌学会の調査では、20年11月2、4木曜日に掲載します

医療最前線 がん治療の今

県立中央病院から

〈231〉

コロナ禍検診控えに警鐘 進行患者大幅に増加も

新型コロナウイルスの影響を受け、がん検診を控える動きに対する懸念が続いている。山梨県立中央病院でも、発見が遅れ進行した肺がん患者を手術するケースが増えているという。同院呼吸器外科

行がん（ステージⅡ以上）では、手術の難易度が上がり、抗がん剤などの追加治療が必要になる場合がある。治療後の再発リスクも相対的に高まる。

早期発見には検診で胸部エックス線、胸部CT（コンピュータ断層撮影装置）検査を定期的に行うことが欠かせないが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い昨年は肺がんに限らず、がん検診を控える動きが出た。

一方、中込医師は通常の診療と並行して同院ゲノム解析センターの研究施設で肺がん診断の研究を進めている。特殊な解析手法により、血液や尿によるがんの診断の可能性を探る研究が盛んになってきているという。「採血や採尿でがんの有無が分かるようになるればがん検診をより簡単、気軽に受けられるようになる。従来の検査と組み合わせることで早期発見の精度を高めることにもつながる」。中込医師は研究の先にある未来を語る。